



連載 資産運用「茶飲み話」(13)

岡本 和久



「投資教育家」と「ファイナンシャル・ヒーラー®」

ベンジャミン・グレアム の名著、「賢明なる投資家」の序文でウォレン・バフェットが次のように言っています。

生涯を通じての投資で成功するためには、知能指数がずば抜けて高い必要もなければ人並み外れた洞察力を持つことも、内部情報に通じている必要もありません。必要なのは、意思決定のための適切かつ知的なフレームワークと、それを働かせないような力から感情を一定に保つことができる能力です。

私はかねてから自分の天職は「投資教育家」であり、同時に「ファイナンシャル・ヒーラー®」であると考えています。

バフェットのいう「意思決定のための適切かつ知的なフレームワーク」をそれほど知識も、経験も、時間もない一般生活者のために提供するのが「投資教育家」としての私の仕事です。投資を始めるためには決して難しい知識や長い経験は要りません。本当に基礎的なことをいくつか知っておけばよいのです。しかし、また、それを知らずに投資をするとひどいことになる恐れがあります。そして、投資の世界は奥が深いものです。少しずつ投資に習熟してきて、興味が湧いてくるのであれば、さらにステップアップしていけばいいのです。

そして、バフェットの言葉にある「感情を一定に保つことができる」ようにするのが、「ファイナンシャル・ヒーラー®」の仕事です。人生を通じての資産運用は孤独な長旅です。道中、晴天の日ばかりではありません。むしろ、その晴天の日は少ないと言ってもいいでしょう。金融危機、バブル崩壊、



長期投資仲間通信「インベストライフ」

自然災害、インフレやデフレ、戦争、その他諸々の色々なことが起こります。それにマーケットは日々、反応します。特に短期的には極端な動きをすることが多いのです。

それが心の中にストレスを生みます。そして、そのストレスから逃れるために長期投資をやめてしまう人も多いのです。そうならないように、「こういうことも時々あるんだ、安心して自分の定めた道を歩み続ければいいんだ」という「癒し」を与える、それがファイナンシャル・ヒーラー®としての仕事です。

投資教育とファイナンシャル・ヒーリングは長期投資に不可欠な車の両輪です。微力ながら私の仕事によって、少しでも多くの人々が将来の経済的独立を勝ち取り、金融面の束縛から解放されることを心から願っています。

長期投資は視座を高く持とう

10年間の長期投資をするのであれば、少なくとも20年は続く大きな潮流に乗っていなければなりません。なぜなら、もし、10年の投資で10年の潮流に賭けて投資をしていたなら、投資期間を終えて資産を売却しようとするときに、その潮流が変化しているからです。その場合は当然、その資産の評価は下がっている可能性が高く、せっかく長期間投資をしてきても満足のゆくリターンを得にくいからです。

もし、30歳代の人が30年後の退職資金を形成するために投資をするのであれば、当然、50～60年は続くトレンドに投資をする必要があります。そのような長いトレンドを考えるのであれば、当然、より幅広い視野とより長期の視点が必要です。ちまちまとした毎日起こる出来事はアワのようなものです。アワではなく潮流を見ることが必要です。

個別銘柄はどうなるかわかりません。大成功する企業もあるでしょう。また、立派な企業と思われていても倒産や廃業になってしまう例も枚挙にいとまがありません。国にしても同じです。60年代、日本は奇跡の成長を遂げました。70年代、80年代、日本は光り輝いていました。でも、いまは減速する国内需要で悩んでいます。永遠の成長産業だと思われた半導体産業もいまはすっかりコモディティ化してしまいました。やはりすばらしい成長を遂げたVTR(ビデオ・テープ・レコーダー)は、いまやDVDやブルーレイに取って代わられてしまいました。

それでは何十年も続くトレンドとはいったい何なのでしょう。例えば、地球全体の人口増加は確実に起こるでしょう。その人口増加は現在、貧困に悩む国々で起こります。グローバル化は人類が誕生して以来の超長期の潮流です。情報化も同様です。これらは地球経済のフラット化をもたらすでしょう。それが貧困地域の人口増加に対する答えでもあるでしょう。しかし、エネルギー問題、水、



長期投資仲間通信「インベストライフ」

食料の問題も深刻化するでしょうし、環境問題も大きな課題です。そして、世界中でグローバル化に対応したインフラ投資が起こり、また、新技術の開発も続くでしょう。

結局、地球経済全体を買う、そして、目先のことではなく非常に長いメガトレンドに基づいた投資をするというのが答えです。私はそれがグローバルなインデックス投資だと考えています。長期投資には高い視座が必要です。

靴下を買うように株を買おう

アメリカに「靴下(ソックス)を買うように株(ストック)を買おう」ということわざがあります。Socks と Stocks というたった一文字、「t」が入るか入らないかで購買行動が大きく変わります。靴下を買うときは安くなれば安くなるほどみんな喜んで買います。でも、株式の場合は逆で、高くなるほどみんな喜んで買い、安くなると誰も見向きもしなくなるのです。縦軸に価格、横軸に数量をとると、靴下の場合は右肩下がり、株式の場合は右肩上がりの線になるのです。

本当は誰でも株は安く買いたいと思っているはずですが、では、なぜ、安くなっているときに買わないのでしょうか。それは、もっと安くなるかも知れないと思うからです。下がっているのだから損をするかも知れないという恐れを持つのでしょうか。

でも、多くの人ほど底では買えないことを知っています。だから、買いたい人も、「まあ、上がりだしたら買えばいい」と考えるのでしょうか。しかし、また、上がりだしたら、今度は、「あんなに安かったのに」という安値覚えにとらわれてしまいます。今度、下がったら買おうと思う。みんながそう思っているからなかなか下がらないということになるのです。つまり、少しでも安く買いたいという欲望が邪魔をして行動が取れないのです。

現在の定期預金金利はいうに及ばず、長期国債の利回りでも1%以下です。東証1部の株式利回りは1.5%ぐらいあります。その意味では、値下がりを持って銀行におカネを寝かせておくと、この株式の利回り分だけは損をしているのです。値下がりしたらそこで買おうと思ってもなかなかうまくいくものではない。今後も株式市場は波乱を続けるでしょう。ですから、とにかくじっくりと腰を据えて積立投資を続けていることが大切なのです。

マルチョイと投資

私は人生を通じての資産運用の方法を啓蒙する活動をしています。しかし、「方法論」はお教えしますが、何をかうべきかということはお話しません。それはそれぞれの方が考えるべきことだからです。ところが、投資セミナーなどに来られる多くの方が求めるのは、「難しい話はともかく、要する



長期投資仲間通信「インベストライフ」

に何を買えばいいのですか？」ということが多いのです。私のセミナーでも口では言わなくても、「きっと本音はそうなんだろうなあ」と思うことがしばしばあります。

故三原淳雄さんからこんな話を聞いたことがあります。三原さんがアメリカに住んでおられたころ、子供さんは現地の中学校に行っていたそうです。そのときの試験問題が「清教徒たちはなぜアメリカに渡ってきたのかその理由を書きなさい」という論文形式のものだったそうです。日本に帰ってきて学校で出た試験は「清教徒がアメリカに渡ってきたのは何年ですか」というものだったとお子さんが驚いていたというのです。

いま、日本の試験は四択のようなマルチプルチョイス(マルチョイ)形式のものが多いと聞きます。マルチョイでは、解答の選択肢がいくつか与えられます。受験者はそのひとつずつを検討してマルかバツかを考えていきます。そして、最終的に「これが一番、正解の確率が高いだろう」というものを選択します。子供の頃からそのようなやり方で試験を受けてきた人たちは、解答の候補をいくつか与えられ、そのひとつずつに自分なりの判断を加えて最後に正解をひとつ選ぶことに慣れているのです。しかも、かならず唯一の絶対的に正しい答えがあると信じている。そして、それ以外のものはすべて間違いだという考え方に慣らされています。

これは投資ではありえないことです。投資では、まず、選択肢は自分のニーズに合わせて考えなければならない。しかも、絶対的な正解はなく、すべて不確実性を内包しています。そのリスクをどのようにコントロールするか、バランスを取りながら自分に適した答えを作り出すことが必要なのです。その方法が資産配分であり、分散投資なのです。確定拠出型(DC)プランのメニューでも、どれが一番上がりそうかという視点から商品を選んでしまう。それが上がった(あるいは下がってしまったら)次の商品をメニューから選ぶ。ポートフォリオという発想が希薄なのです。

学校での試験形式を変えるのは簡単ではないでしょう。でも、少なくとも若い人たちに正しい投資を通じて、マルチョイとは違う世界があるということを知ってほしいものです。ある意味、本当の投資教育はそこから始まるのではないのでしょうか。